doi：10. 20776/S13482084-72-P223
千葉大学教育学部研究紀要　第72巻　223～228頁（2024）

高等学校家庭科における思考力を育む授業デザインと学習評価に関する一考察

中山節子[1)]*・白石広子[2)]
[1)]千葉大学・教育学部
[2)]幕張総合高校

A Study on Lesson Design and Learning Assessments for Developing Thinking Skills in High School Home Economics

NAKAYAMA Setsuko[1)]* and SHIRAISHI Hiroko[2)]
[1)]Faculty of Education, Chiba University
[2)]Makuhari Sohgoh High School

本研究の目的は，思考力に焦点を当てた授業デザイン及び学習評価を検討し，一連のプロセスが授業改善につながったのか考察することである。高等学校「家庭科」において，子育て支援策や制度について考える学習活動を設定し，批判的思考力及び創造的思考力を基準としたルーブルリックを用いた評価を行った。具体的な支援策を考える活動を通して，生徒の思考の深まりが見られた。教員自身が生徒に身に付けさせたい資質・能力について追究し，認識を深めていくことが，評価者としての教員の評価の質を向上させることにつながることが明らかとなった。

The purpose of this study was to examine lesson design and learning assessments with a focus on thinking skills, and to consider whether a series of processes led to teaching improvements. Learning activities were set up in high school Home Economics to consider childcare support and systems in Japan. Rubric based assessment was applied based on critical and creative thinking skills. Students showed a deepening of thinking as they grasped the importance of childcare support from multiple perspectives. It became clear that the teachers themselves were pursuing and deepening their awareness of the competencies they wanted their students to acquire. This process has been shown to improve the quality of their assessments.

キーワード：高等学校（High school），家庭科（Home Economics），批判的思考力（Critical thinking），
創造的思考力（Creative thinking），ルーブリック評価（Rubric based assessments）

1．はじめに

2017・2018年度学習指導要領の改訂において，各教科の目標・内容は，学力の三要素である「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「学びに向かう力・人間性等」に基づいて再整理され，これらの資質・能力の育成を支える学習方法として，主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善が推奨された。主体的・対話的で深い学びの実現は容易ではない。荒井（2016）は，学習を，教え込みによる知識の獲得から思考・判断・表現力の獲得へと転換するのであれば，単に学習方法のみならず，これまで以上に教師の授業設計力が問われるとしている。今改訂を期にこれまで高等学校家庭科において試みられてきた主体的・対話的な授業実践を省察し，深い学びの実現に向けた批判的検討が求められる。

さらに，主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図るため，「指導と評価の一体化」がより一層重視され，従来の観点別評価を踏まえ，資質・能力の柱に対応させる形で３観点に整理された。高等学校の評価の現状に目を転ずれば，「指導要録に観点別学習状況の評価を記録している」は13.3％，「通信簿に観点別学習状況の評価を記録している」は11.1％であり，観点別評価が浸透しているとはいえない（浜銀総合研究所，2018）。また，観点別評価が教師の指導改善や生徒の学習改善につながる評価として機能していないと回答した教師は約６割に上っている（ベネッセ，2023）。

野中（2016）の高等学校家庭科教員を対象とした授業と評価に関する実態調査においては，「常に省察・授業評価をして，授業改善を心がけている」や「省察・授業評価はしているが，授業改善にまで及ばない」教員は３割に達していないことが明らかにされている。また，松尾（2023）は，高等学校家庭科における観点別評価について，①観点別評価基準と規準をどのように設定するのか，②評価材料・評価観点・観点別の割合などにより算出される評定が真の評価となっているのか，③学校に家庭科専任教員が１名のみというケースが多く，評価に関する課題を相談できないという３つの戸惑いを挙げている。高等学校家庭科では，家庭科担当教員が一人体制を取っている学校も多く，授業研究によって授業改善をしていく機会が持ちにくく，指導と一体化下評価の実施の

*連絡先著者：中山節子　nakayase@faculty.chiba-u.jp

困難さが推察される。

本研究の第一の目的は，緒に就いたばかりの高等学校の観点別評価のうち，思考力に焦点を当てた授業デザイン及び学習評価を検討すること，第二の目的は第一の目的とした一連のプロセスが授業改善につながったのか考察することである。

２．研究方法

⑴　対象について

筆者のうち１名の勤務校である千葉県内にある公立高等学校第１学年総合学科の必修科目，家庭基礎（２単位）の授業を対象とした。評価対象とした生徒は120名であり，授業実施時期は2020年７月である。

⑵　授業デザイン

人口減少，少子化が進む背景には，子どもを産み，育て，働く親の存在があり，その生活の中に子どもがいる。高等学校家庭科で行われている保育学習は，子どもの発達への理解を基にしながら，社会の一員として次世代を育む社会の環境をどのように整えていくのかを考える機会となっている（倉持，2022）。現行の高等学校学習指導要領（2018年告示）「家庭基礎」では，子どもの発達と保育（２内容⑴イ）で，「乳幼児の心身の発達と生活，親の役割と保育，子どもの育つ環境について理解させ，子どもを生み育てることの意義を考えさせるとともに，子どもの発達のために親や家族及び地域や社会の果たす役割について認識」させ，その取扱いについては「乳幼児や高齢者とのとの触れ合いや交流などの実践的な活動を取り入れるよう努めること」とされている[1)]。実践的・体験的な学習活動を通して，これからの社会を築いていく子どもの育ちや親の子育て支援を考えることができれば，学びを十分に深めることが期待できることは多くの研究が示すところである（岡野ら，2012；叶内・倉持，2014；シェイファー，2023）。

直接的な体験の効果が実証されているものの，授業時間数や学習集団規模，教員の勤務形態と負担等により実施が困難な状況もある（松岡・倉持，2019）。本研究の対象校は大規模校である。選択授業である保育基礎（２クラス）では，ふれ合い体験を実施しており，１日12人ほどの小グループにわけ，４日間かけて近隣の認定こども園を訪問している。家庭基礎の保育学習の中で，履修者全員を同様の形式でふれ合い体験を取り入れた学習を実施することは，困難な状況にある。本単元の授業の課題としては，「少子化対策として子育て支援策をもっと充実させる」「意識を変える」など具体性や発展性に乏しい学びに留まってしまい，限られた環境，条件，授業時間数の中でも，学びを通じた真の理解，深い理解を促す授業改善が求められている。そのために，主題に対する興味を喚起して学習への動機付けを行い，思考力を働かせながら問題の解決に向けた学習活動を試みることとした。

単元の目標は，「子どもを産み育てる過程にある課題を様々な視点から捉え，問題意識を高め，仕事と子育ての両立を支援し，子育てしやすい環境にしていくための支援策や制度について考える」である。授業は２時間構成とし，まず１時間目でまず子育て世代が直面する生活課題を取り上げ，問題意識を持たせ，２時間目では，仕事と子育ての両立に焦点を当てた資料を提示し，班で具体的な子育て支援策を考えさせた。

⑶　思考力のルーブルリック評価

授業実践時は新学習指導要領への移行期間であった。対象校における評価と評定の状況は，明確な観点別評価は実施されておらず，定期テストなどの考査75％，保育や調理実習の課題やプリント15～20％，授業での平常点５～10％で５段階の評定を定めていた[2)]。また授業実践者はこれまでに思考力に焦点を当てた授業デザインやその評価の実践経験がない。評価指標の選定においては，単元の学習目標と指導法に合致しているかを検討し，汎用性のある資質・能力の育成と評価を測るGPS-Academic（長谷川，2016）を参考に「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」の３つの思考力に分けてルーブリックを検討した。GPS-Academicをベースにした理由としては，必修授業である「産業社会と人間」科目において，授業実践者が担任として学年全体で取り扱い，授業実践者及び生徒が精通しているツールである点が考慮された。

各２時間に設定したルーブリックを表１に示す。１時間目については，授業目標「子どもを産み育てる過程にある課題を，データをもとにさまざまな視点から捉え，問題意識を高める。」に沿ってGPS-Academicの３つの思考力のうち批判的思考力を基準としたルーブルリックを作成した。批判的思考を働かせながら，子育て支援の課題を，複数の視点から社会的背景と結び付けて考えることができた記述については評価Ａとした。２時間目については，授業目標「仕事と子育ての両立を支援し，子育てをしやすい環境にしていくためには，日本にどんな支援策や制度があったらよいか考える。」に沿って，創造的思考力を基準としたルーブリックを作成した。他国の支援策の特徴や違いを理解し，日本の課題に即した解決策を見出している記述については評価Ａとした。

３．結　　果

⑴　授業の流れと生徒の様子

２時間の指導目標および指導内容を表２に示す。

１）１時間目

導入①として「保育園落ちた。日本死ね」ブログ[3)]の全文を読ませた。ブログの執筆者がこの先，子どもを保育園に入れることができず，育休の延長もできなかった場合，キャリアや人生設計にどのような影響が出るかについて，考察させた。考察したことをウェビングマップにまとめさせることにより，生徒の思考と線をつなぐことによって思考の関係性を視覚化した。

生徒は，怒りを率直に表現した乱暴なこの文章に対し，共感しづらい様子も見せていた。ウェビングマップを進めていくうちに，「保育園に入れなかった」という１つの事例から，社会的背景や要因，当事者からの視点，当事者のキャリア等のような影響が見られるのか整理する

表１　各時間ごとに設定したルーブリック

	「GPS-Academic」の定義と評価観点		本授業実践のルーブルリック			
	力の定義	評価の観点	授業目標	評価Ａ	評価Ｂ	評価Ｃ
批判的思考力	必要な情報を取り出し，いろいろな視点から考え，自分の考えを筋道立てて説明するための思考力	・情報を抽出し，吟味する ・論理的に組み立てて表現する	１時間目 子どもを産み育てる過程にある課題を，データをもとにさまざまな視点から捉え，問題意識を高める。	提示された資料や事例をもとに，子育ての課題点について，複数の視点から問題を捉え，社会的背景と結びつけて考えることができる。	提示された資料から，必要な情報を取り出すことができる。	自分なりの観点で，情報を書きだし，評価することができる。
創造的思考力	情報をつないだり，別の場面に応用したりすることで，問題を見つけ新たな解決策を生み出す思考力	・情報を関連づける・類推する ・問題を見いだし，解決策を生み出す	２時間目 仕事と子育ての両立を支援し，子育てをしやすい環境にしていくためには，日本にどんな支援策や制度があったらよいか考える。	それぞれの国の支援策の特徴を理解し，違いを認めつつ，日本の課題点に合うような建設的策を考えることができる。	他国との信念や価値観の違いを理解し，それぞれの支援策のよさを理解することができる。	他国の支援策を理解し，尊重することができる。

表２　指導目標と指導内容

	指導目標	指導内容
第１時	子どもを産み育てる過程にある課題を，データをもとにさまざまな視点から捉え，問題意識を高める。	導入①「保育園落ちた。日本死ね」のブログを読んで，ウェビング・マップを作成する。 展開②ブログの内容について以下２つのデータをもとに検証する。 ・「保育所等関連状況取りまとめ：保育所等待機児童数および保育所等利用率の推移」 ・「妻の年齢別に見た，理想の子ども数をもたない理由」 展開③子育てで直面する「困りごと」をいくつかあげ，課題点とその解決策を考える。 事例１ 妻はフルタイムで働いていましたが，双子の子を妊娠中，夫は会社員で現在５年に渡って継続しているプロジェクトのリーダーをしています。妻の実家は沖縄のため，出産後に頼る親類はおらず，妻は育休を１年取得予定，夫にも３か月の育休をとって欲しいと考えています。 Ｑ１　皆さんが夫なら，育休をとることに対してどんなことが心配になりますか？ Ｑ２　妻が仕事に復帰し，子どもは無事に小学生になりました。妻は，今日は会議でいつもより帰りが遅くなりそう，夫は最近繁忙期を迎え毎日帰りは21時です。そんななか，学校帰りの双子から「鍵を忘れて家に入れない」と電話が入りました。 どうしたらいいでしょうか。 事例２ 妻は専業主婦です。夫は全国転勤の会社員のため，この春に東京に引っ越してきました。夫からは，「子どもの教育は任せたよ，いい大学に入れるためには小さい時からの習い事や塾も大切だから，しっかり選んでね」と言われています。４歳の息子は少々やんちゃ坊主で，ママ友との関係も少し不安があります。 Ｑ３　子どもの教育へのプレッシャーを感じてしまう一方で，やんちゃな息子にイライラして，つい大きな声で怒ってしまうこともしばしば……。悩みを誰に相談したらよいでしょうか。 まとめ④感想を書く
第２時	仕事と子育ての両立を支援し，子育てをしやすい環境にしていくためには，日本にどんな支援策や制度があったらよいか考える。	導入①各種データと資料を基にデータを読み取る ・「夫の休日の家事・育児時間別に見た第２子以降の出生状況」 ・「諸外国との意識の比較」 展開②これまでの授業内容をふまえ，仕事と子育ての両立を支援し，子育てをしやすい環境にしていくためには，どんな支援策や制度があったらよいか考える。 展開③班で支援策を発表し，班でもっともよい案をクラスで発表する。 まとめ④感想を書く。

ことで，保育園に入れないことによって起こりうる，さまざまな困難を想像することができ，思考力の広がりが見られた。

展開②では，ブログの内容をそのまま受け入れるのではなく，内容に関するデータを提示し，それらを読み解きながら確認することで，批判的思考力を働かせて正確

に物事を捉えさせるようにした。

まず，「待機児童数の推移と近年の保育利用率の推移」（厚生労働省，2019）を見ながら，日本に待機児童はどれくらい存在しているのかを確認した。また，ブログ中にある「金があれば子どもを産むってやつがゴマンといるんだから」の内容について確認した。「妻の年齢別に見た，理想の子ども数をもたない理由」（国立社会保障・人口問題研究所，2015）を用いて，理想の子ども数をもたない理由について，総数では「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」が最も多いことを確認した。女性の年齢が20～30代では「仕事に差し支える」の回答が多く，高齢になると「高年齢で産むのが嫌だから」や「欲しいけれどできない」などの理由が，上位になる。理想の子ども数をもたない理由として，お金の問題が大きいが，年齢によってはキャリアや不妊などお金以外の理由で理想の子ども数を持つことができない点を読み取らせた。また「保護者が支出した教育費」の表を添付し，具体的にどれくらい教育費がかかっているのか提示した。

展開③では，子育てをする中で起きる家庭内での困りごとの例と関連する質問をいくつか提示し，子育てする親の気持ちを想像することで，これらの課題を当事者目線で課題解決を考えさせた。また，その課題を解決するために「あったらよいと思うシステム」を検討させた。国や自治体がどういった制度をつくるかだけでなく，家族や地域・社会，会社などの協力や理解が必要であることにも触れるようにした。例えば，「Q2子どもが鍵を忘れて家に入れない」については，解決策として「ITを活用した鍵の開錠」，「地域住民との結びつき」，「急な対応もできるお預かりサービスの利用」，「学校や保育園の一次預かり施設」，「早退させてもらうシステム」など多方面からのアプローチによる解決策が挙げられた。最後に，まとめ④として本時の感想を書かせルーブリックを用いて評価した。

２）２時間目

導入①では，子育て支援策を考えるにあたり，３点の資料を提示した。

まず，「夫の休日の家事・育児時間別に見た第２子以降の出生状況」（厚生労働省，2015）から夫の育児時間が長いほど第２子の出生率が高いことを確認した。次に諸外国の子育て意識調査（内閣府，2016）や子育て支援制度（内閣府，2007）を確認し，支援の手厚いスウェーデンをはじめとする高福祉国家の「大きな政府」と，アメリカを中心とする「小さな政府」の話を盛り込みながら，各国の支援策を紹介し，さらに日本の企業規模でおこなわれる子育て支援として，ファミリーフレンドリー企業の取り組みを紹介した。

展開②では，１時間目の日本の子育て環境の課題点を踏まえ，「仕事と子育ての両立を支援し，子育てをしやすい環境にしていくためには，日本にどんな支援策や制度があったらよいと思うか」を考えさせた。各国の子育て支援策を紹介し，子育て支援策を検討させた。もっとも多く出た支援策は，給付金や保育園の増設であった。１時間目に提示したデータをもとにベビーシッターの公務員化など具体的なアイデアを出す生徒もいた。展開③でそれぞれの考えた案を班で共有した上でもっともよい支援策を１つ選ばせ，全体で共有した。最後に，本時の感想を書かせルーブリックを用いて評価した。

⑵　各時間におけるルーブリック評価

表３に各時間の生徒の記述内容の例を示す。１時間目は，批判的思考力を基準としたルーブルリックを用いた評価を行った。多くの生徒が課題を捉え問題意識を持つことができた。評価Ａの生徒はさらにそれらの課題と社会的背景と関連させ，考えられる対策などについても言及するなど思考の深まりが読み取れた。２時間目は，創造的思考力を基準としたルーブリックを用いて評価を行った。評価Ａの生徒の記述では，スウェーデンとの大きな差を指摘した上で，日本の課題に即した支援策を提案したり，企業側の視点に立ったり，税金や国家の在り方にまで思考を広げている。実際に生徒からあげられた案は，すでに一部の自治体で実施されているものもあった。すでにあるサービスを余すことなく利用する意識が必要であるという視点をもつことができた生徒もいた。

４．総　　括

⑴　思考力に焦点を当てた授業デザイン及び学習評価

高等学校においては，成年年齢が18歳に引き下げられることに伴い，これまで以上に社会で求められる資質・能力の育成が重要となっている。生徒が小中学校段階で身に付けた資質・能力をさらに発展させるために，高校家庭科で育む資質・能力を整理し，目標や評価の再考，さらには教員の評価の質の向上を図ることが求められている。高等学校における評価の現状は，授業内容や学習の進め方の妥当性を検証し，授業改善に活かすものという捉え方がされにくく，観点別学習状況の評価への理解も十分とは言えない。

本研究においては，思考力，とりわけ批判的思考力と創造的思考力に焦点を当てた授業デザイン及び観点別評価を検討した。生徒の感想からは，具体的な支援策を考える中で，財源の確保，子育て支援を実現させる難しさ，制度設計の重要性など踏み込んだ記述内容が多く見られ，複数の視点から子育て支援の重要性を捉えることができたといえる。

GPS-Academicでは，３つの思考力が取り上げられており，批判的思考力と創造的思考力の他に協働的思考力がある。本授業実践では授業時間数が２時間と限られており，協働的思考力を測ることができる学習活動が十分にできないと判断し，評価観点に含めなかった。この項目を評価するには，今回の実践の場合で言えば，日本と各国の支援策の比較や，自分と他者の考えの共通点・相違点を深く理解した上で，気づきを得るといった過程が必要であろう。例えば，班ごとに各国の子育て支援策を調べて共有することで，国による違いや共通点に気づき，それらを踏まえて，自分たちはどうしていくのがよいのかを考察させることによって協働的思考力が期待できる。さらに視点を変え，班ごとに自分たちが「国の子育て支援」「市の子育て支援課」「企業内の子育て支援プロジェクト」「地域の子育てサロン」の担当者だったらどのよ

表３　生徒の記述内容と評価の例

	評価Ａ		評価Ｂ
第１時	少子化を防ぐためには，子どもを増やすしかないのに保育園に入れないと意味がないと思う。国がもっと国民の気持ちになって考えて対策を私たちにわかりやすい形で示してほしいなと思った。子どもを産むと金銭面だけではなく精神的，体力的にも負担がかかるし，親だけではどうしようもないことも多くあるので，周りにいる人と助け合ってできる育児が一番楽しそうだなと思った。妻１人に負担がいかないようにまずは，ふたりで支えあうことがよいと思う。	子育てにはお金が必要であるのはわかったが，そのほかにも周りの人たちの助け合いや協力も必要になると思う。男性の育休取得ももっととりやすくしたり，会社に子どもを連れてこられたり，お金だけでないものも必要だと思う。老人ホームはどんどん増えていくのに，幼稚園が近所であまり増えていないのは，会社がつくろうとしても利益があまり上がらないので作らず，どんどん少子化していく負の連鎖になっていくと思う。	子育てを安心しておこなえるために，あらゆる課題点があるということがわかりました。子どもを産みたいのに産めない人が増え，少子化が進まないようにお金に関する改革が必然になるなと思いました。
第２時	いろいろと支援策や制度の改革は見つかるものの，それが簡単には実現できないのが今の日本の現状であって，改善する必要があると思う。しっかり私たちが国に対して声をあげ，届けていかないと，この状況は変わらないので，将来今日の授業で出たような解決策が実行されていればいいなと思う。また，国が動いたとしても１人１人の意識が低くサービスなどを利用しないのはもったいないことなので，もっとお互いに理解しあい，国民全体で団結していくべきだと感じた。	今までずっと日本で生きてきたから日本の子育て制度があたりまえだと思っていた，でも，スウェーデンと比べてみると日本の子育てのしづらさがよくわかった。スウェーデンとの大きな違いは「夫」の育児時間だと思う。なかなか今の日本だと父が休むことに少し変な感じがしてしまっている。その考えを改善するためにも，スウェーデンのボーナス制度は，日本も取り入れてほしいなと思った。友達の意見で出た，ベビーシッターを公務員にする制度はとてもいいなと思った。ニュースとか見ていて，ベビーシッターのイメージがあまりよくない。でも公務員にしてくれれば安心するし，利用者も増えると思った。	国とか会社とか地域の取り組みで子育てのしやすさがかなり変わると思いました。他の人の意見を聞いて，こういう政策が本当にあったらいいなと思いました。国によって考え方がかなり違うことに驚きました。

うな提案をするか，班でまとめ発表するなどの学習活動も考えられる。支援を受ける側だけでなく，支援をする側に立つことで，金銭的な課題点や，サービス利用者の活用リテラシーの重要性など新たに広がりのある考え方を見ることができるだろう。

⑵　思考力に焦点を当てた観点別評価と授業改善

授業実践者は，授業デザインの段階から，思考力とはどういったものなのかを自問自答を繰り返した。今回GPS-Academicを足掛かりにして，思考力を細分化して，この授業で描く○○的思考力は何かと自身に問いを設定し，○○が何なのか，またこの授業における○○をどう解釈するのかを問い続けることにより，明確な授業デザインを描くことができたと振り返る。同時に授業デザインの難しさを認識したとも語った。自身が失敗に終わったと感じた授業を例に挙げると，明確な授業目標を持つことができたとしても，教材や授業展開など授業目標に対するアプローチが異なれば，必ずしも授業改善につながらないと述べている。

また，ルーブリックの設定により，生徒の思考の深まりを可視化することができたと振り返った。これまでの指導において，生徒同士の話し合いの場や時間を設けていたが，この活動が生徒の思考の深まりにつながっているのか疑問があったという。ルーブルリックの基準の設定によって，特にＡとＢの基準の差を認識することができ，指導のポイントや授業展開について修正すべき箇所が明確となり，授業改善につながったと述べている。今回のように授業後の感想を評価として用いる場合，授業目標や内容と学習者が学んだとする内容のズレが見られることもある。努力を要する状況の生徒が見られた場合は，指導に活かす評価として取り扱い，生徒への助言する際に活用する（文部科学省国立教育政策研究所，2021）ことも考えられる。

さらに授業実践者は振り返りの中で，「迷い」があったとの語りがあった。様々な情報を統合して複雑な状況を考察したり，新しいことを生み出す創造的な学習活動により思考力が深まっていくことは重要なこととして理解している一方で，生徒が知らない事実や知識が多く，それらを自身や将来の生活にどう活かすのかについて考えさせる学習活動を中心に考えるべきではないかという揺らぎである。野田ら（2004）は，中学校家庭科の評価研究の過程で，どのような資質・能力を家庭科で育成するのかについて省察する機会となったことを明らかにしている。生徒に身に付けさせたい資質・能力について教員自身が追究し，認識を深めていくことが，評価者としての教員の評価の質を向上させることにつながるといえる。

本研究の課題として，パフォーマンス課題の設定について取り上げて述べておく。通常１～２時間程度の小単

元については，パフォーマンス課題には適さない（西岡・石井，2019）ことから，本研究においては，授業設計の段階でパフォーマンス課題を想定していなかった。パフォーマンス課題を設定することにより，さらに家庭科の本質的な問いに迫り，知の構造と評価方法を教師自身が整理することができる有効な手立てとなることが期待できる。今後は，複数の小単元を組み合わせて中単元などを設定してパフォーマンス課題の設定することも検討したい。

註

１）平成27年３月20日に閣議決定された少子化社会対策大綱において，乳幼児触れ合い体験等の子育てに対する理解を広める取組の推進が示されたことも後押しとなっているといえる。

２）2022年学習指導要領の全面実施により，観点別評価を定めている。考査は全体の50％，課題と平常点で50％を評価の目安としている。

３）https://anond.hatelabo.jp/20160215171759

謝　辞

本研究はJSPS科研費20K02728の助成を受けたものです。

引用文献

荒井紀子．（2016）．学習指導要領改訂における教科の役割：家庭科の視点から，日本教科教育学会誌，39(3)，85-90.

ベネッセコーポレーション．（2023）．学校現場における観点別評価の現状と課題，VIEW next，2，4-6.

伊深祥子．（2018）．学びを深める家庭科教育，日本家庭科教育学会誌，61，(3)，172-175.

岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美・金田利子．（2012）．中・高生の家庭科における「幼児とのふれ合い体験」を含む保育学習の効果―幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の変化とその関連―，日本家庭科教育学会誌，63(4)，175-184.

叶内茜・倉持清美．（2014）．中学校家庭科のふれ合い体験プログラムによる効果の比較―幼児への肯定的意識・育児への積極性と自尊感情尺度から，日本家政学会誌，65(2)，58-63.

倉持清美．（2022）．家庭科保育学習の課題，日本家庭科教育学会誌，64(4)，233-243.

厚生労働省．（2019）．保育所等関連状況取りまとめ（令和元年４月１日）.

厚生労働省．（2015）．第14回21世紀成年者縦断調査（平成14年未成年者）.

国立社会保障・人口問題研究所．（2015）．第15回出生動向基本調査.

シェイファー実緒・中山節子・安藤藍．（2023）．中学校家庭科保育学習における乳幼児来校型のふれ合い体験の試み，千葉大学教育学部紀要，71，53-60.

内閣府．（2007）．平成19年版男女共同参画白書.

内閣府．（2016）．平成27年度少子化社会に関する国際意識調査.

西岡加名恵・石井英真．（2019）．教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価，日本標準.

野田知子・管野久美子・出井玲子・石川勝江・伊深祥子・阿部睦子・鶴田敦子．（2004）．評価から考える授業づくり（その１），第47回日本家庭科教育学会大会研究発表要旨集，14.

野中美津枝．（2016）．高校家庭科における授業デザインと授業評価に関する実態調査からみる現状と課題，日本家庭科教育学会誌，59(2)，73-83.

浜銀総合研究所．（2018）．学習指導と学習評価に対する意識調査報告書.

長谷川康代．（2016）．汎用性のある資質・能力をどう育み，そして，どのように測るのか，VIEW21，4，16-19.

松尾裕子．（2023）．観点別評価に戸惑う，家庭科研究，375，12-13.

松岡晃代・倉持清美．（2019）．幼児触れ合い体験実施推進につながる必要事項の検討―中学校　家庭科教員に対する質問紙調査から―，日本家庭科教育学会誌，62(1)，3-14.

文部科学省国立教育政策研究所．（2021）．「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料高等学校家庭.